

都市政策・地域経済ワークショップ1 第12回 議事録

【テーマ】 これまでの芸術教育、人種差別、政策の複雑な関係性を振り返って

ードクメンタを事例に

【講師】 アレキサンダー・ヘンチェル氏：オルデンブルク大学 講師

藤野 一夫氏：神戸大学 名誉教授

担当教員：吉田 隆之 教授

【日時】 2025 年 6 月 27 日（金）18:30～21:20

【場所】 Zoom によるオンライン

【参加者】 都市政策・地域経済コース M1 学生 他

■ 講義概要

ドイツが第二次世界大戦後、人種差別主義から解放されたという歴史観は神話であるのか、ドイツにおける人種差別主義の歴史および芸術とのつながりを解説いただいた。また、この解放という神話が、いかにしてナチスの加害者やその思想を戦後ドイツ社会に統合し、人種差別主義を形を変えて存続させる役割を果たしたかを、世界的な現代美術展「ドクメンタ」の歴史を事例にお話いただいた。

■ 講義内容

1. 講師プロフィール

- アレキサンダー・ヘンチェル氏

大学卒業後、美術教育者として美術館や展覧会で勤務。

2007 年のドクメンタ 12 にも美術教育者として携わる。

2. 講義内容

(1) 背景と目的

- ・美術教育者として、アートには世の中を批判的に見て変革をもたらすことができるポジティブな面がある一方で、同時に負の固定観念を強化してしまう暴力性とその歴史についても教育することが重要だと考えている。
- ・この講義は「ドイツが 1945 年に突然人種差別主義から解放されたという歴史見解は一つの神話である」ということを前提にしている。
- ・ある社会が自らの暴力の歴史を克服したという「神話」を生産し、その神話を利用して、実際には暴力を同時代に適応した形で継続させる現象は「過去の政治」であり、ドクメンタはその典型例である。

(2) ドイツの歴史、人種差別主義と芸術の歴史的つながり

- ・ナチスの独裁が始まる 100 年以上も前に、ドイツには、ドイツ人が同質の「民族」(Volk)であるとする思想家たちがおり、民族的起源・血筋だけでなく、言語、文化、芸術が民族の同一性を定義する要素だと考えていた。
- ・19 世紀後半には、「ドイツ人はすべての人間のなかでも秀でており、世界の支配者であるのは当然である」という人種的優越性や、異文化の影響を受けたものに「退廃」とレッテルを張るような言説もあった。

- ・子どもたちが学校で自由に才能を発揮することを学べば、ドイツ人は他より優れた同質の民族になれるという考え方もあり、ナチスはこの芸術と教育に対する考え方を都合よく利用したにすぎない。

a. ナチスにとって「正しくない」芸術

- ・1937年に開催された「退廃芸術」展では、モダニズムの最も重要な芸術家たちの作品が紹介され、ドイツ人が他の「人種」とされる人たちと混血すれば退化することを証明したかったとされる。

b. ナチスにとって「正しい」芸術

- ・同じく1937年に開催された「大ドイツ美術展」では、ナチスにとって望ましい男女のロールモデルだけが描かれた「純粋な」ドイツ芸術のみを展示した。

a,b ふたつの展覧会はナチスによって教育の媒体として利用され、文化的な混ざり合いを危険な要素として拒絶するよう、視覚的に教育された。

(3) ドクメンタのふたつの物語

a. 第一のバージョン

- ・ドクメンタは、ナチスによって「退廃芸術」として誹謗されたモダンアートを復権させ、ドイツが非人種差別的で世界に開かれた国家へと変貌を遂げたことを象徴する、輝かしい成功物語として語られる。これは、ナチズムの野蛮さからの解放と克服のシンボルであった。

b. 第二のバージョン

- ・上記の公式見解の裏で、ドクメンタはナチス時代の人種差別的な思想を継承・適応させていた。その中心人物が、ドクメンタの共同創設者である美術史家ヴェルナー・ハフトマンである。

- ・ハフトマンは、ナチスに迫害された芸術家たちの名誉を回復させることを公言していた。しかし、2021年に公開された資料により、彼自身がナチ党員であり、戦争犯罪にも関与していたことが明らかになった。

- ・この事実は、第一回ドクメンタの出品作家の選定に直接的な影響を及ぼしていた。近年の研究で、ハフトマンが企画した展示には、ユダヤ人や黒人のアーティストが意図的に排除されていたことが判明した。ハフトマンは「ドイツの近代画家にユダヤ人は一人もいない」とコメントさえしていた。

(4) 「適応された人種差別主義」が容認された背景

- ・ナチスの独裁時代末期にはナチ党だけで800万人近い党員がおり、「脱ナチス化」で公的機関にあまりに多くの空席ができたため、非常に多くのナチスがその公職を維持した。

- ・アメリカをはじめとする西側諸国は、ソ連との対立の中で、旧ナチスの専門知識（特に諜報分野）を必要としたため、徹底した旧ナチスの排除に関心がなかった。

- ・1960年代までアメリカはアパルトヘイト国家であり、イギリスやフランスも植民地支配を続けていた。ナチスの人種差別を「一時的な逸脱」と位置づけることで、自らが抱える人種差別問題を正当化する意図があったと、歴史

家ラウル・ユングは指摘している。

(5) ドクメンタおよび芸術と社会批判

- ・ドクメンタは、3年前のドクメンタ 15 での支配的な「西側」に対する抵抗を含め、繰り返し重要な批判の舞台にもなってきた。

- ・芸術とその公開展示を民主主義教育の重要な手段とすることは非常に重要である。

- ・これらすべての批判の歴史的必然性を理解しそこから学ぶことは、現在をより複雑な形で理解し、その責任を引き受ける機会を得ることである。

3. 藤野氏からのゲストコメントとヘンチェル氏の応答

(1) エミール・ノルデをめぐる神話

- ・ノルデは、ナチスに作品を「退廃芸術」の象徴とされ、迫害された受難の画家として知られてきた。

- ・しかし、近年の研究で、ノルデ自身が熱心なナチス支持者であり、反ユダヤ主義者であったことが判明している。彼が「退廃芸術家」とされたのは、ナチス内部の文化政策をめぐる路線対立の結果であった。

- ・ヴェルナー・ハフトマンは、著書『描かれざる絵』を通じて、ナチスに屈せず創作を続けた孤高の芸術家というノルデの神話的イメージを創り上げた。この神話は、ナチス時代にも「より良いドイツ」が存在した証拠を求める戦後ドイツ人の集団心理に應えるものであり、ハフトマンはノルデのナチス支持という事実

と、自身の過去を巧妙に隠蔽した。

(2) 東西冷戦下におけるドクメンタの政治性

- ・ドクメンタが担ったもう一つの重要な政治的ミッションとして、東西冷戦下における「西側自由主義陣営の政治美学」の発信がある。

- ・ソ連圏の「社会主義リアリズム」に対抗するものとして、抽象芸術が「自由」や「民主主義」、「政治からの芸術の自律性」を象徴するものと位置づけられた。特に第二回ドクメンタではアメリカの抽象美術が際立って多く展示され、その政治的意図は明らかであった。

- ・ドクメンタはその由来からして極めて政治的な国際美術展であり、その政治性は3つの次元に区別して考えられる。

- ① 内容的に世界各地の政治的問題をテーマとする芸術作品の展示

- ② ①と相関関係にあるが、ディレクション、キュレーションにおける政治性

- ③ それぞれの時代と国際関係の政治状況によって規定された政治性

(3) 芸術の自律性

- ・政治からの芸術の自律性を主張することそのものが政治であり、芸術の自律性は幻想であるが、その幻想を追求することこそが、芸術および美術教育において非常に重要である。

- ・このように、現実的には不可能であっても何かを目指すことは、カントの「統治者の原理」にも通ずる、根源的で根本的な、身分や社会的地位に関わらない普

遍的な営みである。

4. 質疑応答

【質問】

ドイツ社会の現状をどう考えるか。

大戦後人種差別を克服し責任を果たしている国家というイメージも強い印象があるが、どの程度の規模で今日のような議論がなされているのか。

【回答】

ナチスの直後の政府は、イスラエルを最初に国家として承認するなど、確かに人種差別を克服する様々な取り組みを行ったが、同時にナチス加害者の責任を軽くする法律もいくつも作られた。

しかし、この同時性は 90 年代後半まで指摘されておらず、現在のドイツ国内でも意見の分かれるところである。

感覚としては、「責任を認めて変わった」と考える人が多数派で、複雑なバージョンの歴史については今でも聞きたくない人が多いのでは。

ドキュメンタ 15 もその表れである。反ユダヤ主義はドイツ国外からもたらされるものであり、対処すべき問題だと認識される一方で、ドイツ国内の反ユダヤ主義については議論の俎上に載せられない。

ガザ紛争における反ユダヤ主義に対する決議もなされたが、これも国外の反ユダヤ主義にのみ言及しているものである。

【質問】

保守政党が優勢である現在のドイツにおいて、アートはどのような立ち位置にあるのか。

【回答】

アートシーン自体も統一的でなく多様であるため、考え方もいろいろあることは前提として、ドキュメンタ 15 の後、政府がアート展示をコントロールしようとする動きが強化されたことは、大規模とは言えない展示においても言えることだろう。

ガザ紛争における反ユダヤ主義に対する決議にも、芸術の自律性が狭められるような文言も含まれている。

特にセクシュアリティなど、議論を呼びそうなテーマのアートに対しては規制が厳しく、世界のアーティストから表現の場としてドイツが選ばれなくなっているようにも思える。

【質問】

アートは政治を中庸にし得るか。政治に対するアートの役割とは。

【回答】

回答が難しい質問だが、アートが政治から完全に自由であることは不可能であり、また政治に直接的な影響をもたらすことも難しい。

しかしながら、社会の中で制限を超えたり批判したりする場が守られ、可視化されることは非常に重要であり、アートはその役割を果たすことができる。

妥協して決断を下す場である政治に対して、アートは正反対に妥協せず根本的な問いを徹底的に問い続けることができる場であるので、そういった場を人々が共有できるのは非常に意義深いことである。

以上